



洋学文庫
文庫8
B 47



文政四年
辛酉

己年秋葉船二艘積荷物及出和銀

藤本 四葉二千斤 松 三万二千五百斤

本綿田 千石斤 錫 一万九千七百斤

丁子 九千石斤 白磁瓶 五万五千石

本音 二千四百石 真砂 一万石

野島 五千石 市橋 三千七百石

左之左屋 三千石 榊 九石

白屋 七石 茶子 七石

前賣日 七石 花子 七石

黒肉 三千石 形子 十石

精藏

39-8103

價銀日	八五	蓋海松葉日	十五
核櫻日	七五	櫻	十五
黒日	十五	紅小豆粉	十五
有赤日	十五	價花名日	十五
黒日	十五	紅豆粉	十五
有赤日	十五	花名日	十五
黒日	十五	中國上赤粉	四十五
新唐日	三十五	赤名コロダ	十五
紅日	十五	赤名日	十五
時日	十五	花名日	四十五

出子	三十五	絞	十五
象牙	十四	子カトシ	七十五
金銭	四十五		
別吸膏			
藤木	三万七千	母丁子	五百六十斤
丁子	五百斤	マルル阿仙系	千四百
サラタ河仙系	四千五百斤	水根	百七拾九斤
別吸粉			
白砂粉	或拾五丸	田粉丸	日五丸送り
昭			

精慮堂藏

三斗五部包 カヒタニ

麦 三斗一斗斤

或十斗部包 三斗五部包

麦 或万七千部包 安息香 百斤

麦切 十三斤六分 菓子及果 二部

椰子油 拾九部 硝子部 子

或アルモラシ 六斤七分 戸會 四斤八分

テリアカ 四斤八分 ヲクリカニキリ 四斤八分

サフラン 三斗二斗斤 燒モノ 三斗

三斗五部包 二斗五部包

サフラン 十四部 細香 部包

稜 二部 椰子油 四部

テラニ油 十部 麦 二斗五斗斤

四斗五部包 へトル

安息香 三斗 麦切 十斗斤八分

菓子及果 部包 椰子油 十四部

アルアルモノニヤ 四斤七分 硝子部 部

口會 四斤八分 テリアカ 六斤四分

ヲクリカニキリ 四斤 サホニ 三斗

サフラン 三斗二斗斤

七ヶ多部包

エニケレン

テリアカ

廿四斤

ヲクリカニキリ

廿四斤

サルアルモニアシ

廿六斤

ササキ

廿二斤

サフラン

七斤二合

田舎

四十八斤

ハルサム コバイハ

三斤

琥珀油

四十八斤

硝子悉

昂

花紙

色々

七ヶ多部包

ステウツ

安息香

石斤

タニ印

十二斤

硝子悉

二瓶

椰子油

十九斤

硝子悉

多

サルアルモニアシ 五斤

ササキ

四斤八合

テリアカ

四斤八合

ヲクリカニキリ

四斤

サフラン

七斤二合

ササキ

石斤

焚物

昂

七ヶ多部包

外科

硝子悉

昂

代延香

三斤二合

ハルサム

石斤

ハルサム コバイハ 三斤二合

度切

九斤二合

シユステウラルトル

三斤二合

肉桂水

一フラスコ

ロースワートル

二フラスコ

ゴウラトワートル

ハフラスコ

ササキ

半おニト

硝子悉

三フラスコ

メリウス精

八合

精慮

エメリハルテル 五匁 テリアカ 三斤二合
サルアルモシアシ糖 八合

いりあぶら

茶碗 十匁 サフラン 二斤八合

豆の十四 砒子 五匁

九すあぶら

砒子 五匁 名酒 五匁

テリアカ 糖二斤 椰子油 四匁

サフラン 五匁

十すあぶら

サフラン 二斤四合 ヲクリカニキリ 十一斤二合
口合 十一斤二合 サルアルモシアシ 八斤
シエブリマート 四斤八合 テリアカ 十一斤二合
ハルサム エンパイハ 三斤三合 椰子油 五匁

十すあぶら

厚切 四十斤 ハルシヤ 六匁

煮皮 五匁 テリアカ 七匁

琥珀油 一ポンス 五匁 四斤七合五匁

ヲクリカニキリ 五匁 カヤフリテ油 三ポンス

菱枝 十四匁 玉 五匁

鼻目鏡

ハ

金箔

十枚

鏡

四十一

十二寸五分部尾

硝子窓

あり

花紙一色 色々

十三寸五分部尾

漆切

六十八斤

キナク

四ツテスコ

サフラン

キナク

ヲクリカニキリ 漆切

ウツルムコイト

ハ斤

細末目

一ツテスコ

漆

用漆泥

交唱吧磨

一冊

サフラン

キナク

ウツカール

五本

星形漆板

紅・ヘルトア

漆板

奥書

敷

三角七角部尾 角五分部尾

角五分部尾

硝子引籠

キナク

硝子入

四ツ

漆床

キナク

漆板

十本

折ハヤカ

四本

テレイフ

一切

漆板

一切

テリヤカ

一ホント

サフラン

一ホント

鋼

ハカ子

三ホント

佛用心商

时斗鏡リ 二ツ

遠目鏡 一ツ

巾同 二本

八儿之十皮 十枚

書物

書經

少形袖时斗

一ツ

大竹

一ツ

花毛毬

一ツ

弓台尺

全保切子掛

二枚

金モル

一ツ

銀目

一ツ

編フニタ

一ツ

金入巾国織

一ツ

时斗鏡リ

三ツ

テリアカ

五ホニト

袷时斗

五ツ

エリクル

三ツ

金縁籠

十

短筒

但小きり 袴

小遠目鏡

三ツ

巾目

五反

巾ノ度量

三枚

袷时斗

袴鏡

二面

高木作古刀掛

巾小上京所

三反

マルクル石

二ツ

袴时斗

三ツ

丁子

袴ノ新

サマラン

一ホニト

袴抱方高木作古刀掛

袴抱

一ツ

御天鏡

一ツ

精慮堂藏

淨

小同

紙挺

サフラン

一ホニト

至四斗

一ツ

書物

一紙

網進 兵部紙

羊種打

一紙

糸房長崎舎下網被 高崎甲子時

中交皮

二枚

竹手紙

三ツ

硝子板

五枚

何々

二斤

テリアカ

二ホニト

社町斗

三ツ

金世へリ

五五

小遠目紙

五ツ

サフラン

一ホニト

布目上さき

三反

中目紙

一切

修紙

二高

年より日

この修紙作は

遠目紙

二斗

サフラン

一ホニト

白紙タタ

三ツ

テリアカ

三ホニト

至四斗

三ツ

社町斗

三ツ

硝子板

十五枚

年より

後田十市右

布目上さき

二反

サフラン

一ホニト

ハルシヤ皮

五枚

硝子蓋物

四ツ

日紙

五枚

社町斗

三ツ

精慮堂藏

遠目鏡 一冊 金毛一丸 一切

陰鏡 三枚

年より 華師寺久左衛門

硝子鏡 三枚 社時年 三枚

鼻自鏡 二ツ サフラス 一ホニト

巾目上子あし 三反

年より 三反あしあし

サフラス 一ホニト 社時年 一ツ

言語書 一部 巾目上子あし 三反

ラニセツタ 二冊 社時年 三枚

白安を長

テリマカ 三ホニト 晴る屏風 一冊

毛織り屏風 二冊 硝子鏡 三枚

サフラス 一ホニト 巾目上子あし 三反

星時年 六ツ 曲塚 三ツ

硝子鏡 三枚 巾目上子あし 三反

鼻自鏡 一ツ

年より 久松を長

硝子鏡 三枚 社時年 三枚 一切

テリマカ 二ホニト サフラス 一ホニト

五時年

一

社時年一

ひら

長安布

サフラス

一本二ト

テシイフ

一切

ひら

子時おけ

テリアカ

おまき二ト

川根

き橋

サフラス

一本二ト

日

子時おけ

後後

四時

社時年

一フ

金ミール

一切

テシイフ

一切

ラフラス

一本二ト

日

子時おけ

後後

日百

子時

一切

後後

一板

社時年

一フ

サフラス

一本二ト

子時

二フ

サ

五時四九日 子時おけ 後後

サフニ

十斤

三斤ト一メ四五十月

ト硝礫

四十一斤六分

安息香

三斤

蝦卵

五十九斤三升

四分ト

テリアカ

七十六斤五分七厘

ロクハイ

四十五斤五分三厘

in geluid ghewiltet byn verbergen alle
 waer den gelydenmaking so del geesten
 all del vloed des, alle waer den der medijt,
 gient en alle opste verbandelingen des
 vortighen medelgymmetter is mit
 hem, en het hem

文政六年五月八日

Belgia den 18 September 1823

Vergenamen dat het ons zijn te hooren
 wanneer leeste, en enige van den
 17 January, w'd. in getrouheid mog
 ontlangent hebben; gelijk ik wensde
 w'd. weder almede een bestendige
 w'll stand moggen weten in den
 w'd. hier medend een kleinigheid
 bestaende in een poest flandrie
 en koper link koker, op dat w'd.

精慮堂藏

my allert danksby: hult gedankent.
Soeken die al: mittig' kunnisen
byn heb ik trouw mit, dog zul
daarom denken als de vreespen
konnent;
geprijerde jaar heeft alhier
om heert van de forse overbuis,
gare goed, ik wensst te weten,
of die riekte, welke in verduide
landtschapen in vathant verpast

is, ook in de so is gencest; So ga!
Zul ik: my' veel schaikeis doen,
met my' die nte gen' een velding
te geeren, So dan den aart, de
tekeno verdelken, als ook de
midelen die men dan tegen
gebruikt heeft, er welke gemes,
midelen het meest, aan de
verwagting hebben veldaan, en
of het veldaan der aan dekte

No. 470

Zichte over de ziele patienten ook
van byzondere tekenen of vlekken
gekomenek waeren.
Wanneer ik veld met te veel
vergeet zo wens ik gaarne een
bedrugging te hebben van de
genoten Zicht en die in yede heer,
Wen, met aanteekening der oren,
Zijn wansin ieder Zichte het meest
weerd.

Wanneer veld van dit myn
Zin Ziek van Doet had ik Zie als
een grote vriende Ziek ammerken
van Ziekter heer myne vriendelike
Complimenten van veld vader
Zie Ziekling die allet Zie van
veld de grouwde Zie
Hans Stamberg

文政六年
癸未
二艘入

覚

四月廿日 船七隻 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日

人数 四十五人 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日

厚厚人 控去人

右白紙
一 阿多子 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日

人数 三十五人

厚厚人 控去人

×

風從書

一 南年 本船 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日
一 同日 出帆 南地 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日
一 糸今 多子 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日

一 去年 津南 地分 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日
一 古 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日
一 今 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日
一 去年 中 通 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日 船名 延日

石口レヤ玉トト玉 瓦トスバテトモルトカニ因
争備レ存有之ハ以成下平和ヲ成可成也
瓶ト云々トハ油

一市ノ利運也其聲ノ隆モウヤト云ニマテラ田
田阿多其此南館 ハラニハニク商長ト者若心
得達ト儀カクニ一玉ト澄ヲ部ト云々 諸君也表
分取部ト及平和ト

一上トサカク水苟因於地方所出ト見清
雅如ク神ト有之^二船^一 造舟ト却トノ數部
金^{二十四}ト人ト水取行カテ命ト化則今トノ序

トト水ト分連部ト

一時命ト於其^二海^一邊ト也ト舟ト^二廣^一水ト見^二捕^一トカ
分^二通^一高ト^二水^一ト^二足^一清ト

若ト外^二表^一聲ト^二風^一ト^二位^一ト

右カク^二人^一 ヤニコク^二ブロム^一ホフ

新カク^二人^一 ヨハニ^二タイル^一ルム^二テス^一キルル

カ^二紅^一カ^二カ^一ビ^二ト^一ト^二水^一通^二和^一解^二紅^一カ^二上^一ト

未^二七月^一七日

海^二金^一ト^二海^一内^二海^一内^二海^一内^二海^一内

カ^二紅^一精^二行^一物^二ト^一

物々	十四タニ	黒大ラヤ	三十五タニ
白月上	八タニ	桔梗名目	五タニ
濃毛へキ同	拾三タニ	花色目	十二タニ
黄目	五タニ	アキニヤ目	五タニ
茶名目	六タニ	茗茶目	二タニ
トビ名目	一タニ	ウス毛目	一タニ
豊毛おフリ目	一タニ	小ラニヤ	二十五タニ
ラセ板	三十タニ	へルトルニ	三十タニ
大ちやく	四十タニ	アラタ	四十三タニ
大海名目	千百五十三タニ	終大カイキ	四百五十五タニ

コニテキ島	四万タニ	奥大マ	二千タニ
中サササ	六百タニ	同新サササ	三千タニ
四板	二千九百タニ	木綿ヒモ	千七百五十斤
スワウ	拾万五千四百拾斤	銀	一万八千二百六十八斤
船	一万五千十一斤		
母丁子	一万九千四斤		
丁子	一万九斤	本名目	二千二百四拾斤
阿仙糸	七千九百六拾斤	多子牙	四百九十八斤
サメ	四千四百七十四本	夕夜板	七十二万八斤
テカトニ	數七千		
別川高法			
阿仙糸	七千斤	母丁子	千斤
水根	三万七十一斤	産木	三万斤

シイラ 一斤 テレイフ 十二名

別川抄紙

盤木 二万五千斤

メ

市井抄紙

字写尺牘 一冊 漢字集符 三冊

乃古抄 拾名 吹ビロート 十四五ル中

サフラーニ 七名

メ

土方抄紙守様抄紙

乃古抄 三名 金銀モル 沙切

心世るり 五名 サフラーニ 子ホント

テリアカ 四ホント 袂付斗 三ツ

遠目 五名 上履 四枚

硝子番 七名 白具メガ子 二ツ

金イレ 五名

多様抄紙

サフラーニ 五ホント
ハルニヤ皮 十五枚
金銀モル 二ホ
硝子番 一箱
金銀草 五枚
時々サリ 四

テリアカ 四ホント
金銀サハリ 二ホ
袂付斗 五ツ
遠目 二ホ
置付斗 一ツ
硝子番 五ホ

精慮堂

吉永作左衛門様御紙

嶋ビロウド 一キレ

丁子 三斤

吉永作左衛門様御紙

毛セシ 五枚

口菓入 五斤

吉永作左衛門様御紙

ウニエール 一キレ

カチノール 二キレ

吉永作左衛門様御紙

ウニエール 二キレ

布巾 一キレ 年子居付 一揃

吉永作左衛門様御紙

ウニエール 三キレ

ピケイ 一キレ

吉永作左衛門様御紙

カチノール 二キレ

遠鏡 一本 金唐皮 三枚

ウニエール 一キレ

吉永作左衛門様御紙

カチノール 二キレ

万葉集 一キレ

吉永作左衛門様御紙

カチノール 三枚

金毛 一キレ 引籠 一揃

吉永作左衛門様御紙

ウニエール 一キレ

カチノール 二キレ

吉永作左衛門様御紙

カチノール 二枚

毛セシ 一枚 遠鏡 二本

精慮堂藏

金屋草 二枚
ウニコル 三枚
ハルニヤ皮 三枚

三層ハ節ノ草

紋ビロト 一キレ 漢砲 三枚

カチノル 十枚ト 遠月砲 三枚

布ノ子 三枚 沙糖

三層甲ノ草

傍院ハ枚 ウニコル 三枚

福田河田部

印也子 三枚 カチノル 十枚ト

ハルニヤ皮 三枚 三枚

ウニコル 三枚

所々ノ草 其外ハ

三枚 三枚

砂子枚 三枚

青山様

テイム 三枚 石ノ子 拾目

アノベルグレス 三枚

ゴムベテルリウム 三枚

桂付係

キナ

三万二千日

唐豆

日

コトアムモニラク

三万四千日

セメニセドアル

四万四千日

バルサム・ポール

七千日

セニナ

七万二千日

イペカコヤチ

五万四千日

アルセム

八万四千日

セアユイン

三万二千日

サルアルモニヤヒ

日

スベルマセツチ

三万四千日

オラニエシキル油

七万四千日

ウイワトヒスレーム

五万七千日

ハツカテウリ油

七万日

ズイスエトセモス

四万三千日

ヒルギニアニセスラシグウルク

五万七千日

ラキキスヤララバ

六万五千日

メルラ

二万五千日

コログイニトアツベル

三万二千日

アサフーチタ

三万二千日

スカニモニラム

石三十日

メリクリウスシユアリマト

石一箱

テルペンタイン

石一斤

アニモニーチヤおし

石二十五箱

ヒスシット

石一箱

ペルカニシユニト

石十箱

月二禮ノ秘方
石一斤

カネ

石一斤

カゲ

石一斤

石一斤
石一箱
石三箱

硝石

石一斤

サウ

石一斤

サホニ

石一斤

浮石

石一斤

石一斤

テレン油

石一斤

日向末

石一斤

柳子油

石一斤

アラビアゴム

石一斤

丹波油 四斤
 月桂油 二斤
 松節油 七斤
 高香油 十四斤
 丁子油 十四斤
 麻角糖 七斤
 虎子子 十九斤
 ハアルレ油 六斤
 父之キリ 四斤
 二瓶

スナニシトキ
子テリハ鳥ノ東ヒキヲ好ム

五早
ツトテ

経
ツトテ

アムステルダム 五十二ト二十三分 二十一ト三十一分

バンダム ヤハ 六ト五分 百三十二ト五十三分

バタビーア ヤハ 六ト十二分 百二十三ト三十分

慶東 二十三ト八分 百二十九ト四十三分

コニスエケノホル 四十一ト一分 早五ト三十分

コッペンハーガ 五十七ト早五分 二十九ト十分

リサボン オルトガル 三十八ト早五分 七ト三十分

ロンドン 五十一ト三十分 十六ト三十分

下カヲ ミナ 二十二ト 百三十一ト三十七ト

ミットルビュルク ヤーランド 五十一ト三十分 二十ト十七ト

大坂 三十三ト 百三十一ト三十分

ローマ 甲一ト 百三十一ト

ストウクホルム スウェーデン 五十九ト七十分 三十四ト

精慮堂藏

以下
3 丁
白紙

nimmer van dezelve conig vondeel
gheien te hebben.

de pringereid kemmissien is
over den pringeryken gencees
Kunigen dient en in de
Stus der militaire kopsi
talen.

Batavia. A. Z.

de denigende officier van
erandheid in de aide grote

militaire yndeling.
J. y. St. v. d. r.

Batavische Coustant.

A. 1821

N. 12

Zaterdag. den 12 den Mei, 1821.

het gedrukt bevonden hebben, tenzijt mij
naderhand tot herstel der menblyvende
Zwakheid der ingewanden de gewone
bittere versterkende geneesmiddelen
hebben toegediend.

Dit is de beëindiging door ons bij
Europeser aangenend, welke Jacquin
verspreikt van die der inlanders, dat
bij de laatste, de Calomel in ^{de} minste
cijfen moet gegeven worden en

men het dikwijls bij de eerste tekenen
der ziekte met vuur kan toedienen
voedend bestaande uit Lemke
Draagma ^{de} sproonzuur soda, een
gelijk verdeelheid glauben zout en
een a twee droppels vliegende olie,
welke voedsel in de laatste tijden
op Mauritius algemeen in gebruik
waren, betuigende mij euten bij
Europeser en bij heilige Toevallen

④ ~~Van~~ door de braken geslytelyk te rug
 heren, tenzij men by dit alles vooral
 dient zorg te dragen, dat de lippen aan
 houdende warm gebiedt blyve.

Wanneer het gelykt, dat door deze
 behandeling de trevallen bedaren, de
 braken geslytelyk van 't ligeraam terug
 keert, de ledematen niet meer krenten,
 waerby worden opgestrooken, moet

④ ^{naast} men tracht de gal, welke onmiddelyk
 na dat de krampeartige toestand
 geweken is, met hevigheid het darm
 kanaal instroomt, en de ingewanden
 hevig prikfelt, daerby te verwijden,
 waerby wy een purgans bestaande
 uit 10 greinen Calomel en twee scrupels
 veld galappen wortel of ook een
 ander glaubenzout, in twee ouden
 warm peperminthe water opgelost,

Q. *relatide Campophoratum*, met veel *Q.*
ium bedield, gedaan worden.

Wanneer niet tegenstaande deze
 behandeling alle toevalle verengens
 en Zich te versluisen der mond-
 -Alem opdoer, moet men bij de
 Calomel doeges groot giftes *amissid*
Castreum en andere vlijdtige open,
 ekende midelen, vergezeld van sterke
 inspuyvingen van *Argentum* men

ciniale (Kwik Zalf) in de gezele amtshek
 der hude en 't bovenste gedeelte
 der borst.

Tegen den onlesdrbaeres dorst
 welke de acan dete Riechte Labore hende
 lyders het meeste kwelt, geve men
 nu en dan een A Tube Lepeld Warm
 ryst water met een weinig brand
 Wijn, verrijdende eiter, hem op
 eens veel te lates Drinken, deijl

een onze peperment water integereen,
 dan tyden oogenblikkelyk in een warm
 bad te plaatsen en hem daarna te doen
 waschen met warme azak en alyno.
 en van een bloedryk gestel Lynde, een
 nime adenlatine tot placid worden
 toe te doen onder gaem, benedens het
 appliceren van een grote Spaans
 de vlieg pleister op de omtrek der
 mag, en van Kistend wappen

aan de Voeten en Ruiten, benedens het
 houde lakementen van een aftrek,
 sel der Salomille bloemen welk met
 No tot 60 droppels Laudanum Verm,
 engd.

Wanneer eenigen tyd hierop de bra-
 kinge verstandings en de natuurlijke warmte
 niet spoedig terugkeert, moet de doos
 Caromel en Laudanum herhaald,
 en indryvinge van 't linimentum

Slechts weinige uren over 4 lot van
den lijver bedlossen.

Het is dus zeer ligt te begrijpen,
dat men de redding vanden lijver alleen
door de spoedige aanwending van kraam-
stege en wolkraam geheel middelen
beheiken kan.

Wij hebben bid vernemgd de volgende
geneesmiddelen ten bereiking van dit
oogmerk te moeten aanwenden, welke

wij gedeeltelyk van onze onderaandingsker-
~~ker~~ gedeeltelyk aan de Waranenin,
9 van anderen verdruldigd zijn.

Wij hebben dus voorserot ter oplossing
van den heiligen krampartigen toestand
gebruik gemaakt van de mineral hydra-
tygi ri liji du ati, (catamel) in groote
giesten van 20 grein in proeder op eens
te doen inncemen en daarop onmiddelyk
60 droppels laudanum, vermengd met

ene volslagene temig houding (retentie) der gal, en gelyke onderscheiding der huid - dienstverlening

De aanwijzing der geneeskunde komt dus voortnemmentlyk hierop neder.

1°. om deze heilige krampeartige toestand te doen bedaren, om daarvan door de zoo imminent dreigende ontsteking loochen voort te komen.

2°. De belatte huid - dienstverlening

te herstellen, en

3°. De regelmatige werking der spijsverteringswerktuigen te herstellen, en tegen alle neder instorting te waken.

Deze riichte is dus uit zynen aard zeer gewaarlyk en de redding alleen bij een spreedige hulp mooglyk, dewyl alle toevallen hier moet een verbarende snelheid opvolgen, en

enigzins ontstoken; de lucht pypje
 en vóózelver takken (pneumicae) met
 een bloedrij sruim sterk opgevuld
 de breed afgenomen huyde hebben
 wy de heersenen natuurlyke bevond-
 den, eertengetien, dat alle de bloed-
 vaten dozelve, zoo als ook die van
 van het buitenste herspandlichs gedeel-
 met bloed waren opgevuld.
 uit wize jeen ons waingeroorn

ene verdrynselen en de doon ons ge-
 bene opeeningen der lykelyk, slykt it
 dus beweten te hyn, dat de inaste
 voptraak deker zichte moet worden
 Tregerdneven aan eene beitungeworn
 hefige kneempachtige taetand van
 de ventuigen der spijstentee ring en
 mel byzonder van de maag en it
 daaraan grenzende gedeelte van
 den twaalfvingeringen darm te ne vend

geheel samen getrokken; de uitgang
 (zij omid) integendeel verwijderd; het ^{hart} ^{traktat}
 ringelrige gedarmte en het gereele da-
 rmt kanaal ledig en met veel lucht op-
 getest; De Leeren was in eenen vrij na-
 tuurlijken staat en de gal blaas leer-
 sterk met een verdikte ^{zachte} zachte gal-
 opgevuld, terwijl de algemeene gal-
 buis bij de insertie in den twaalf-
 vingrigen darm als loten was;

De alvleesch klier (pankreas) en de
 milt waren zeer natuurlijkt en
 niets buitensgewoon daarvan te
 ontdeeken; de pisblaas was klein
 en geheel samen getrokken, vertoonde
 alle dekte ingewanden in 't algemeen
 tekenen eenen ligte ontsteking.
 in de borst-holte hebben wij 't hart
 en 't hert-zakje in eenen natuurlij-
 ken staat gevonden; de longen

van 't lip, en voortmen alle
 kantteken en eenen ^{上最} vreesdelijke
 angst en veldlagene murede leu-
 kheid; bekomme slaauwteud en
 candidie vani allerlei auct
 tot dat eindelijk de ledematen
 is koud worden, en de toevalls
 der tetanus zijn openbaring
 welke dikwijls tot de hevigste
 graad eenes geheel arter over

briging (epistrotomid) opklimt
 waarvan de lyder onder de hevig-
 gte convulsiens spoedig den geest
 geeft.
 Bij de opening der aan ditz ziekte
 gestoorene lyders hebben wij 't
 volgende opgemerkt.
 in de buids- holte hebben wij
 de maag bevonden uit gezet en geheel ledig
 te zijn, de mond derzelve (cardia)

iene sterke krampe aangedaan, waar
 door de handen en voeten geheel lammer.
 getrokken worden, en die kuis tot een
 buik en de buut - spieren uitstrekken;
 de gurede oppervlakte van 4 ligraam
 wordt met een koud klam zwaart de
 deest; het aangezicht en vooral
 oogen vallen in; het oog zeldde
 wordt mild, behaard en met
 een witte slijmavertige stoffe over.

dekt; de pols kindeft weg en is nauwelijks
 lyde bemerkbaar; een brandende
 hitte in de ingewanden veroorzaakt
 eenen onlesdbaren doot,
 de lydend roepen onopzettelijk om
 koud water, kunnen kuis geen
 openblik in dezelve positie houden,
 werpen alle bedekking af, en
 raken het bed niet te springen,
 dreuen kuis de klederen

in wist inden gappenbeerd heeft.

Wittele overvalt elck eenen, Zonder onderscheid van landaard, gellacht, of sinder den ^oplutzelings, en Zonder eenigen verboden, en doet Zier wist de volgende verdryvelen kennen.

Voort eerst eenne heftige drucking in den buick en wel voornemelyk in de onnestreck des nuchels, vergeheld met onmagelyke pijnen in de luyden, de ma-

ag en ingewanden, welke speedig door benewaadheden en heftige praktingen worden opgesolgt, waarbij eenne wateraertige slym met veel slym vermengd, wordt uitgelood; deke helpde stop ontlast hier te gelyker tyd door den and met sterke persingen (terresmi) en aars, kradende krampartige drydingen in de ingewanden

hierby worden de ledematen door

Beschryving

van

Cholera Morbus;

welke hier het eerst in den markt
tusschen den 22 en 23 ten april
1821, te Samanang, geopenbaard
heeft.

Deze ziekte ^{is} de wezenlyke Cholera mor-
bus, en dezelvde welke hier sedert een
geruimen tyd op verskillende plaatsen

